



平戸市分科会

パネルディスカッション、意見交換

「この地域資源いつ活かす? 今でしょ!!」

コーディネーター **山口 祥義** (株式会社JTB総合研究所 地域振興ディレクター)

パネリスト **岩崎美佐子** (ひらど新鮮市場 参事) **大村 謙吾** (平戸市まちづくり市民委員会 会長)

黒田 成彦 (長崎県平戸市長) **籠手田 恵夫** (NPO法人 平戸観光ウェルカムガイド 理事長)

早田 圭介 (株式会社YOKARO 代表取締役)

テーマ

この地域資源いつ活かす？今でしょ！！

パネルディスカッション

コーディネーター

株式会社JTB総合研究所
地域振興ディレクター

やまぐち よしのり
山口 祥義



平成元年東京大学法学部卒業。同年旧自治省入省。入省後は、自治省・総務省の選挙課主査、準公営企業室課長補佐、固定資産税課課長補佐、内閣官房内閣安全保障・危機管理室参事官補、消防庁総務課理事官、同庁広域応援対策官、内閣府跡地利用促進室長、総務省過疎対策室長等を歴任。またその間、秋田県地方課、鳥取県観光物産課長・財政課長、同県商工労働部長、長崎県総務部長を歴任するなど地方勤務も豊富。平成25年4月より官民交流でJTB総合研究所地域振興ディレクターに就任。なお、平成23年10月から平成24年3月まで東京大学教授(大学院総合文化研究科)を併任。また、地域活性化伝道師(内閣官房)、地域力創造アドバイザー(総務省)として全国の地域支援に尽力。

パネリスト

ひらど新鮮市場 参事

いわさき みさこ
岩崎美佐子



長崎県平戸市生まれ。1983年に平戸市へ帰郷後、旧JA平戸へ入組し農家婦人の指導員として勤務。この間、無人市、朝市等をJA女性部と開設し、農協出荷ができない青果物などを地元で販売することに取り組む。2000年退組し、常設の直売所(ひらど新鮮市場)を開設する。2004年農事組合法人化するともに直売所を移転新築する。2008年直売所にて売ることの出来ない食材を活用した加工所及び米蔵を増築する。地域生産者が栽培契約により栽培された食材を生鮮品として販売できるものとこれまで破棄されていた食材を加工品として販売することにより地域生産者の所得向上に繋げている第一人者である。現在13年経過し組合員230名。また、平戸市で生産された農産物を活かして商品化するなど6次産業化にも取り組んでいる。

パネリスト

平戸市まちづくり
市民委員会 会長

おおむら けんご
大村 謙吾



長崎県平戸市生まれ。専門学校卒業後、福岡県にて就職するが1995年平戸市に帰郷。2001年前津吉しいたけ生産組合設立。2002年加工食品製造販売を開始。2003年農業法人化、2009年平戸市市平町に菌床工場を設置し、長崎県北地区唯一のきのこ総合生産者となる。2013年椎茸では、九州初のオーガニック有機JAS認定工場となり、きのこの有機栽培に取り組む。また、2012年平戸市まちづくり市民委員会を設立し、第7回マニフェスト大賞 マニフェスト推進賞を受賞。現在もマニフェストサイクル運動を継続しながら、まちづくり市民活動を展開中。

パネリスト

長崎県平戸市長

くろだ なるひこ
黒田 成彦



長崎県平戸市生まれ。麗澤大学英文科卒業後、参議院議員下条進一郎氏の秘書として勤務。その後、衆議院議員金子原二郎氏(前長崎県知事、現参議院議員)の秘書として勤務。2002年、長崎県議会議員に初当選後連続3選、2009年11月、豊かな自然と歴史、文化を生かした地域戦略を掲げ、「平戸維新」をスローガンに第2代平戸市長に就任。現在、平戸市を全国に誇れるテーマパークとして位置づけ、「歴史」「恵み」「祈り」をキーワードに、歌人・種田山頭火が称した『日本の公園・ひらど』の再生に向けて、全力を傾注し取り組んでいる。

パネリスト

NPO法人
平戸観光ウェルカムガイド
理事長

こて だよしお
籠手田 恵夫



長崎県平戸市生まれ。地元の県立猶興館高校から東京外国語大学英米科へ入学、1964年卒業と同時に(株)日本交通公社(現JTB)に入社、一貫して国際関係業務に従事。1987年から1992年まで、同社欧州支配人室企画部長兼JTBヨーロッパ取締役として英国ロンドンに駐在。帰国後は国際関係担当部長として観光関連の国際会議に多数参加。2002年JTB退職後帰郷、ボランティアガイドとして活動すると同時に市や観光協会の観光促進業務に関わる。現在は2004年にNPO法人化した「平戸観光ウェルカムガイド」の理事長として会の運営とガイド業務を通じての地域おこしに携わる。

パネリスト

株式会社YOKARO
代表取締役

そうだ けいすけ
早田 圭介



長崎県平戸市生まれ。山口大学経済学部を卒業後、野村證券(株)に入社。1994年に事業承継のために退職し平戸市に帰郷。同市を市場分析し「交流人口の増加」と「ものづくり」が課題であることに気づき事業の30年計画を立てた。1995年食品卸業の(有)早田商店(現、(株)YOKARO)を設立。1999年からは新たにバス事業を展開している。2010年平戸～博多間を運行する会員制バス「YOKAROバス」の運行を開始。現在、北部九州を中心に8ルートで展開し会員は約8万人に拡大中。また、2006年に新食材「野菜のり」を開発する有限会社アイルを設立。今年2月、農商工連携事業として国認定を受け、来年春の販売開始を目指し準備を進めている。

〈山口〉 皆さん、おはようございます。

今日は平戸のほうに、これだけ大勢お集まりいただきまして、ありがとうございます。

議論のスタートとして、実は私、2年前まで長崎県庁にお世話になっておりまして、ちょうど4年ぐらい前だったと思いますけれども、県の移動県庁で、「平戸を何とかせんばいかん」ということで、県の部長たちがいっぱい押し寄せて、平戸をどうしようかという話し合いをしたのですね。そのときには、平戸はイカなどの水産物がいろいろとれるけれども、売るところがないとか、高速道路がないからなかなかうまくいかんとか、愚痴がいっぱいあって、じゃあ、これからその現状認識のもとでどうするみたいな話が戦わされていました。私も大島、^{たくしま}度島とか行ったりして、いろいろつぶさに見させていただいたのですが、地域資源はいっぱいあるけれども、このまちは元気が出てくるのだろうかというタイミングだったのです。

早田さんはそのときもおられたと思いますけれども、どうですか、その後、平戸は変わってきましたか。



〈早田〉 少し元気が出てきたんじゃないかなと思いますけれども。

〈山口〉 例えば、どういうところですか。

〈早田〉 行政の皆様のご協力もいただきまして、田平のほうに平戸瀬戸市場という、目玉というか、核になるような施設ができて、先ほど言っていたきましたようなイカの売り場がないとかなどの点については、生産者の皆様が直接お持ちして販売できるようになりました。消費者との距離を短くして、物を売る楽しみとあったところが、少しずつ生産者の

皆様にもわかってきているんじゃないかなと思いますして、それが起爆剤となり、広がりつつあるんじゃないかなと思っております。



〈山口〉 そうすると、当時言っていた、いろいろな登場人物が大切というか、昨日の全体会でも企業誘致よりも起業家誘致だっという話、要はやる気のある人をどんどん育てようって話がメインになっていて、「地域資源いつ活かす？ 誰活かす？ あなたでしょ！」という感じで話し合われていたと思うんですけど、盛り上がってきましたか。

〈早田〉 随分盛り上がってきているんじゃないかと思います。ただ、まだまだポテンシャルはあるけど芽が出てこないとかいう方もいらっしゃると思うんですけど、以前からすると、随分と様変わりしてきているんじゃないかと思います。私は青年部とか、若い人たちとつき合っていますけれども、彼らも目線が少し上になってきているんじゃないかなと思いますので、これからは楽しみです。

〈山口〉 というのですが、辛口の籠手田さんはどうですか。いい感じですか。地域資源は徐々に活かされつつありますか。問題はもちろんあるんでしょうけれども。

〈籠手田〉 私はここに書いてあるように、ボランティアガイドという形で、平戸の観光を促進する立場にあります。

平戸の方はよくご存じでしょうけれど、平戸の観光のセンター的な平戸港交流広場というのが港にあって、そこに観光ガイドステーションという小屋があります。この小屋は、もともと市がオランダ商館

を復元するためにつくられていたんですけれど、一時放置されて、空き家になっていたのを2年前から借り受けまして、私どもボランティアガイドの会員が当番で、年中無休でやっています。お正月も盆も毎日、朝の8時半から夕方4時半まであけてやっていて、そこへたくさんのお客さんが来て、いろいろなお話をするので、いろいろな情報が得られるんですけれども、平戸に対して非常にいい印象を語って帰られる方が多くなっています。

それから、もう一つは最近の現象ですけれども、このところ、実は平戸もマスメディアで取り上げられたんですね。特に中央のマスメディア、NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」や、高倉健が主演した「あなたへ」で、これもNHKがドキュメンタリーで長々と放送してくれましたし、さらに、つい最近は、「妻はくノ一」というドラマ、そういうメジャーなものがありましたので、たくさん来られて、少し市民の間でも、「結構来ているんだな」という感じが出てきていると思います。特に、「あなたへ」のロケ地だった薄香^{うすか}などは、今まで誰も観光客の寄りつかなかったところにどっと行くようになったという状態があります。

私どもは、ガイドステーションに来られる方に対して、民間の立場、お客さんの目線に立って、ありとあらゆるご相談だとか、ご要望に応じられるような態勢をとっています。例えば、ちょっと2時間ほど散歩して、ショッピングしたり観光したいときは、どうぞとって無料でお荷物もお預かりしておりますし、雨が降って行きたくないから休みたいという方には、お茶も差し上げて、話し相手になって、そういう行政ではやりにくいこともいろいろやっています。そういうことで、いろいろなお話が聞けるのは非常にうれしいし、平戸は非常にいいところだと言っています。



私は生まれも育ちも平戸なんですけれど、すぐ東京に行きまして、実は、前の東京オリンピック昭和39年のときに今のJTB、日本交通公社に入って、それからずっとこういう観光の仕事に携わっています。世界中、日本中、だいたい主な観光地は回っていて、その目で見ても平戸はいいと思っています、最近でも、来てくれる方が、平戸は静かでほんとうにいいところだと言ってくれる。これは最高の褒め言葉だと思います。我々平戸市民としては、自信を持って人にお勧めできる観光地だと思っていますし、それを目指していろいろな起業家といいますか、いろいろな方が育ってくれるといいなと思っています。

〈山口〉 ありがとうございます。

ちょっとこのデータを見ていただきたいんですけれども。実は私も、この4月から官民交流ということで、総務省からJTBにお世話になっていて、いろいろ観光地のデータなども勉強しているんですけれども、これはJTB総研の資料で、世代別の地域認知度です。この黒い字が60代、青い字が20代、30代なんです。

平戸にとって非常に問題なのは、平戸は、この黒い字、60代は認知度がかなり高いところにあります。ところが、この青い字、20代、30代はかなり低くなっています。結局、我々より上の世代は、教科書に出てくることもあって、みんな平戸を知っているじゃないですか。非常に脚光を浴びて、団体旅行で大勢が訪れた時期です。ところが、時代がだんだん変わってきて、今までのビッグネームというだけでは、平戸が売れなくなってきたわけですね。新たな時代を迎えて再構築しなければいけない。時代は変わっています。その中で今、平戸が模索していると思うんですよ。

ですから、過去の栄光は一旦整理して、新たに、この新しい時代に平戸をどのように伸ばしていくのか、地域資源を活かしていくのかというところが非常に焦点になると思うんです。市長、その移動県庁の時期から4年市長をやられて、工夫したところとか、何か手応えを感じているところはありますか。

〈黒田〉 こういう指標を拝見したときに、どういう声が市民の皆様から来るかと言うと、「ほら、若かもんに知られとらんやろ」と。「じゃあ、どうすればいい」と言ったら、「ディズニーランドやユニバーサルスタジオジャパンのごとせんばたい」と言うわけです。そういうふうな都会志向の考えになるのがちょっと残念なんです。もっと、自然や食材、ある

いは歴史の活かし方を、まさに地域資源の活かし方を若者抜きでやれるという可能性もありながら、それを取り組みもせず、都会のそういった若者が憧れるものを真似すればというふうなことになってしまうのが悲しいです。



今般、JTBさんのおかげで、九州最大手の進学塾、英進館をお迎えして、去年の夏休み、そして今年の冬休みと夏休み、それぞれ4泊、6泊規模の合宿宿泊を実現させていただきました。このことで何が得られたかという、子供たちが体験する無人島上陸とか、農業・漁業体験は全て本物だったんです。要するに、USJとか、ディズニーランドのような作りものではなくて、本物の海、山、島、緑をじかに体験することによる感動、そこに生活する人たちとの触れ合いによってリセットする。それが逆に都市住民に対する再検証、再認識につながっています。

おもしろいことを言うと、春休みの3月末に来た子供たちが一旦帰る。「お父さん楽しかった。もう1回行きたい」というので、今度は4月の次の週の休みにまた来るといふ、すぐリピート効果があったんです。ですから、我々は決してその歴史と史跡などの地域資源で年配者だけを呼ぶのではなくて、若者にも受け入れられる素材を持っているという再認識を、これからきちんと市民の中にも位置づけていかなければならないと思っています。

〈山口〉 そう言われれば、私も長崎にいたときは家族で住んでいたのですが、当時子供3人のうち小学生2人が、4泊5日ぐらいで千里ヶ浜の牧場に厄介になりました。迎えに行くと、子供たちはもう平戸から離れたくないと泣いてしまったんです。お馬さんの思い出に加え、平戸の人たちにすごくよくして

もらったらしくて、人と人のつながりというのは強いなと思いました。今、中学生になりましたけれど、いまだに「お父さん、もう1回平戸行きたい」と言うんです。単にお城があるとか施設面ではなくて、今の市長の話もそうですけれど、子供たちの思いついて激しく揺さぶられるんですよね。そうしたときに、別に遠いとかいうことは関係なくて、どうしても会いに行きたいって思うみたいです。

もうひとつ、当時思ったことがあります。高度経済成長期には、国主導だったり、行政主導が強かったのですが、国民みんなが豊かさといった共通目標を目指して、ある程度気持ちがひとつになっていて、非常にわかりやすい構造だったんですよ。ところが、先ほどのお話のように、今は地域発で、地域が自分たちで頑張らないといけない時代になってきて、そういう意味では、行政っていうのは、上にあるものでも何でもなくて、一緒にタイアップして動いてくれるパートナーであるべき状況になってきた。自治体は住民の幸せに向けた利益の代表体のようなものであるべきですから。その辺の感覚、行政の立ち位置っていうのは徐々に変わりつつありますか。

〈大村〉 今の平戸については、早田さんがさっきおっしゃったように、ちょっと元気が出始めてきたのかなという感じは受けます。

我々まちづくりの団体、市民委員会からすると、まず首長を選ぶときの公開討論会ができたこととか、それ以降、検証大会というのを市民が自発的にできるようになったというのは、平戸にとってはすごい前進かなと思っています。その裏返しの中で、私たちが子供のときには見えてこなかったところが大人になったら見えてきて、結構平戸ってぎすぎすしてるよねっていう話も聞いたりしてきたんですけど



も、先ほど言ったように、地域分権っていうんですか、今から地域が自立していかなければいけない中で、市民がもっともって自立をして、それで行政も自立をして、お互いが自立をした中で、最初から協働というのではなくて、お互いがまず自立をすることを目的に、最後には結びつくという形でいったらいいのではないかと考えています。

〈山口〉 官との問題については、時間があつたら後でまたじっくりやりたいと思いますけれども。

岩崎さん、平戸っていうと水産というイメージが強い中で、実は非常に農業も盛んなところですけども、生産者たちのおつき合いの中で、輝く瞬間とありますか。最近どうですか。

〈岩崎〉 直売所を始めたころは、新しい野菜っていうのがなかなか出てこなかったんです。とにかく白菜とか大根などの昔ながらの野菜はあったんですけども、しかし、このころは私よりもずっと高齢者の方でも新しい野菜をつくって出荷される。それをいかに消費者の方に手にとってもらって、食べてもらうかという工夫をするために、我々の直売所では野菜ソムリエの資格をうちのスタッフ3名に取らせました。一人だと天狗になりますので、3人に取らせて切磋琢磨して、新しい野菜を消費者の方にもご提供できるように努めております。



〈山口〉 ありがとうございます。

4年前よりだいぶ輝いてきたようで、平戸がだんだん逆襲に転じて、新たな平戸がこれからできていくのかなという雰囲気を感じます。

島根県の海士町あまほしは、地元の島前高校とうぜんのクラスが2クラスに増えたことで非常に有名ですが、地域の人

が教師ということで高校生を地域ぐるみで支援をして、この隠岐の島はすばらしいねという教育をしているのですね。そして、将来は立派になって帰ってきて、ここで仕事を自分で創ってくれという教育をしているのです。どこかの企業を町が連れてきて就職させるのではなく、あなたたちが大きく育って、世界に羽ばたいて起業に戻って来いということです。今では、Iターンも300人から400人になっています。

最近、全国的にも郷土教育というのが小中学校で終わったりするケースが多いんですけど、高校が大事ですね。多くの生徒は、高校から外に出て行く場合が多いので、いかに地域の人たちが高校生たちに対して郷土のよさを説明できるか。ついつい親が自分の地域を卑下したり、誇りに思えなかったりするのには、子供にとってむちゃくちゃ悲しいことですね。そこが変わるかどうか。

先ほど言いましたように、観光客もそうです。訪れて、住民みんなが輝いていれば、訪れた方々が絶対楽しいし、住民から「つまらんよ。このまちは何もなかけんが」って言われたら、誰が行くかということなんですよね。そういう意味で私は、4年前より雰囲気がいぶよくなってきたと思いました。

籠手田さん、どうぞ。

〈籠手田〉 今の高校生に対する教育っていいですか、それは大事です。

今どこでもいろいろご当地検定やっていますけれども、私もNPOでは平戸検定というのを5年前からやっています。市の委託事業としてやっているんですが、平戸高校というのが島の中央部にありまして、今回初めて、平戸高校の生徒200名全員に受けてもらうんですよ。もちろん無料で受けていただきます。学校からの依頼に応じまして、一般の平戸検定の講習とは別に、そのための講習会も受講してもらいます。この2月に、平戸高校の200名全員が平戸検定を受けるんです。そして郷土のことをよく知ってもらう。いずれにしろ彼らは出ていく。平戸には大学もなければ大きな会社もないのでみんな出ていく。そこで、平戸のことを伝えられる、これが非常に大事なことです。

もうひとつ、平戸には長崎県で一番古い猶興館という高等学校があるんです。その同窓会は非常に強力で、人数も多いわけですけど、東京支部が一番多いんです。ここで去年初めて平戸検定の試験をやったんです。人数はそれほどでもなかったんですが、受けてくれた人は非常に感激してくれまして、そ

こから発展して、同窓会を東京で毎年やったり、そこで平戸検定にちなんで平戸のことについて皆さんとクイズをやったりしました。去年は初級だけやったんですけど、今年はぜひ中級もやってくれということで、今年もやることになりました。

平戸検定は、平戸市からの委託で、ガイド養成が主目的のため、最初東京でやると言ったら、行政からダメだと言われたんです。我々は自分でやりますということで東京でやりました。それから平戸高校の件についても、市の委託ではなく自分たちだけでやることにしました。子供にとって郷土というのはものすごく大事だと思うので、今おっしゃっていただいたことをありがたく思います。

〈山口〉 最後の市役所の関係ってなかなか難しく、意外と全国的にも、あのとき市役所が何もしてくれなかったから今があるということが結構あります。だから支援の仕方というのはなかなか難しい。自分たちで頑張ったから成功したというのが一番幸せ、ハッピーです。補助金等とのつき合い方、これが非常に悩ましいところです。

いろいろ話してまいりましたが、パネリストの皆さん方、今日はそれぞれ説明、話をしたいことがありまして、その説明の前に、打ち合わせなしにむちゃ振りをしたので、今こういう和気あいあいとした雰囲気になっております。では、今自分たちでやられていること、皆さん方にお話したいことについて、早田さんからお話いただきたいと思います。

〈早田〉 私、株式会社YOKAROの早田と申します。すみません、ご挨拶が遅れました。私は株式会社YOKAROというバス会社と、それから有限会社アイルという会社で「野菜のり」という、まだ世の中には出していない、新しい食材を開発している2つの会社をやっています。社是は敬天愛人ということで、天を敬い、人を愛する企業を目指しています。私自身は、大阪で野村証券というところに就職しまして、その後、平戸に帰ってまいりました。成せば成るが私のモットーです。

私、28歳のときに平戸に帰ってきたんですけども、この地で30年間はビジネスをやっていないといけないと思っていたので、そのときに30年計画をつくりました。最初の10年間で人脈づくりをして、次に成長して、そして最後は人材づくりをする、将来は100億の企業をつくりたいということを28歳の私は考えました。



そのときに、平戸のことを分析してみました。いろんな分析をしてデータをとったんですけども、平戸市と福岡市の年代別の人口分布図を見たときに、明らかに形が違うことに気づいたんです。この部分です。先ほど高校生の話がありましたけれども、まず、18歳を過ぎた途端に、平戸は人口が激減をします。ここの一気に下がるところです。その分福岡が一気に上がる。つまり、田舎から都会に、人がまず一度流れてしまうんです。このことに気づきました。そうすると、経済学上、購買力という一番お金を使ってくれる年代というのがまず平戸市にはいないんだということで、この地域内だけでお金を循環させるということはなかなか難しいということに、まず気づきました。

ところが、もうひとつ気づいたことがあります。ここ、福岡の人口が下がり始めるところです。これは、35歳ぐらいから40歳ぐらいです。逆に、平戸は少し戻ってくるんです。どういうことか。私自身も28歳で平戸に帰ってきましたけれども、一旦出た子供たちに、ふるさとに帰りたいという気持ちがあるんだな、もしくはふるさとのことがものすごく気になっているんだなということに気づいたんです。そうすると、何をしないとイケないのか。要は事業をするに当たって、まずは、都会と平戸の交流人口を増やさないとイケないことに気づきました。

今現在、この交流人口を増やすために、交通アクセスの改善ということで、お手元にあるYOKAROバスという年会費5,000円を払うと何でも乗れるというバスをつくって、今、九州全域で8ルートつくらせていただいています。

それから、もうひとつ気づいたことがありました。産業別の売り上げです。データが古いんですけど、平戸市と全国について、まず一番下の人口で割合を

見ると、3万8,000人と1億2,700万人で、平戸市は全体の3,342分の1というベンチマークになる。このデータを考えると、どこが一番マイナスなのか、よくないところかなといったときに、製造業が突出して悪いんです。ほかの、例えば農業ですとか、水産業というのは、この人口の割合からいうと優秀な成績なんです。その他の事業もそこそこ頑張っているんですけど、製造業が突出して悪い、GDPが44億しかないということに気づきました。要はマイナス部分、弱点を克服することがまちづくり、もしくは地域の活性化になると思いましたので、ものづくりをしないといけないなということを考えて、私が先ほど言いました、野菜のりという事業をもう15年間こつこつとやっています、やっと商品がそろそろ出てくるかなという状況になっています。

先ほどお話にありました高校生の話、私はご紹介いただきました猶興館高校のPTA会長をさせていただいていますが、私も同じ意見です。ふるさとに帰って、ここで起業する、事を起こしていくということを目指したい。特に今は物流がよくなっていますので、ものづくりをすれば日本全国もしくは世界中にでも物が売れる。私の商品も今、世界に売ろうとしているんですけども、そういったことができることに気づきまして、ぜひやってもらいたいなと思っています。

今、平戸高校の全員が平戸検定を受けるというのを聞いて、私鳥肌が立って、猶興館もどこかのタイミングでやらないといけないのかなというふうに改めて思いました。今、私自身も大学生とおつき合いをしようということで、先日、福岡のとある大学の大学生で、学生でありながら会社を興した人と出会ったんですけども、彼と話しているときに、実は大学生の中でも半分は以上は起業したいという気持ちがあるんだよと言っていました。今、いろいろな一流企業に就職しても、未来永劫、要は退職するまでいられるかどうかかわからない時代なので、そういうことを考えている若者たちがいるんだなということに気づかされて、地域でも、もしかしてできることがあるのではないかと感じております。

〈山口〉 もう結論が出ている感じですよ。まさに早田さんのおっしゃるとおりだと思いますし、ふるさとを高校生に意識してもらうということと、あと世界なんです。だから、非常にミクロなところ、地域のコミュニティとかをしっかりと高校生に意識していただく。もう一つは、九州、日本じゃなくて世界です

よ。そういう視点を持ってもらう。もともと平戸というのは、世界に開かれたまちじゃないですか。ほんとうはそこが得意技なはずですよ。そういうことを実践されているわけですよ。ありがとうございます。

では次に、大村さん、お願いします。



〈大村〉 先ほどきちんと答えればよかったんですけど、自分たちのコミュニティからどんどん生産世代が少なくなってくると、まちが崩壊していくと思います。その中でコミュニティの地域力というのが問われる時代になってくる。現状は働くときにも、子育てをする場所でも、隣のおじちゃんに預けるとか、コミュニティ力や地域力が低下していると思うんですよ。ですから、我々はこれから住民の意識改革というか、意識アップをしていかないと、どんどん大変になる。もちろん住民の意識となると、行政の方も全て住民になりますので、一人ひとりの意識を上げていかないといけないなということで我々の活動をしています。

そこで、5分間きっちりしゃべるように動画をつくりましたので、どうぞお願いします。

早田さんのようにべらべら出てきませんので、読ませていただきます。

平成21年10月、社団法人北松浦青年会議所の主催で、平戸市初のローカルマニフェスト公開討論会が開催されました。このとき、約2,100人を超す来場者があり、この事業が市民委員会を発足するきっかけとなりました。

平成23年4月、青年会議所から合同のマニフェスト検証市民委員会が発足し、月1回の委員会を開催して、行政とのヒアリングや、各グループに分かれて

の検証、アンケートの実施や、関係団体等へ出向いてヒアリングを行い、市長manifestoの検証作業が行われました。そのときの写真です。

平成23年11月、平戸市manifesto中間検証大会を開催。市民評価はもちろん、平戸市議会の議員さんの方にも評価シートを作成していただいて、ポストイットを使って会場からの意見収集や意見交換を行いました。

平成23年12月、社団法人北松浦青年会議所より、平戸市まちづくり市民委員会に活動が引き継がれました。明日の平戸を考えるミーティングと題した会議を重ね、まずは平戸市長のmanifestoの中間検証大会を通して、さらなる疑問点や質問点を洗い出して、それに優先順位を定め、月1回の市民委員会で協議、集約し、市民委員会からの質問書「manifesto検証大会後の動きについて」を作成して、平成24年9月に市長へ訪問し、意見書とともに意見交換を行いました。

昨年、平成24年11月、全国約1,900団体の中から、第7回全国manifesto大賞市民部門で推進賞を受賞いたしました。明日の天気が気になるくらい、平戸市民の一人ひとりが明日の平戸のまちづくり、市政を気にしながら行動すれば、もっともっとよいまちづくりができるという思いでmanifestoサイクル運動を行っている市民委員会を、全国に紹介することができました。

そして、今年、平成25年5月、雇用と地域経済、そしてコミュニティ、子育て、定住化について、それらに関係する若者約30人、商業・農水産業関係者や、子育てNPO、PTA関係者らと黒田市長を交えて、フォーカスミーティングを行いました。そのうち、市長からこの場でコミットしたプランが幾つか出てきました。Iターン、Uターン者や、定住を断念された方へのアンケート調査も行いました。この会場会議はユーストリームを活用してネット配信を行い、その後出された意見を集約して市へ提出します。これはまだ現在進行中です。

そして今年の5月と7月ですけれども、「ちびっ子たちから見たオランダ商館」と題して、私たちは今年度、小中学生の総合学習時間に、空いているスクールバスを活用して、未来の宣伝マンになる子供たちに平戸学や郷土愛、特産品などを刻むと同時に、子供の目線からオランダ商館を評価、検証してもらいました。また、開設1年目の平戸瀬戸市場も同様に見学を行い、実際に平戸の特産品を購入してもらうなどして、意見を求めました。私自身、成人したときには福

岡に住んでおりましたが、このような授業があれば、もっともっと平戸のことを熱く語ることができたらうらやましく思った授業です。

そして、平成25年、今年の8月ですけれども、manifesto最終検証、評価のため、行政のヒアリングを行いました。先日でございますけれども、10月4日、平戸市まちづくり大会manifesto最終検証大会をここで行いました。その際も、ユーストリームを使ってライブ映像をネット配信して、その内容はその後も動画ファイルとしてネット上に保存させていただいております。

だいたい平戸市まちづくり市民委員会の活動を紹介させていただきました。最後になりますけれども、平戸市まちづくり市民委員会は、よりよい明るい豊かなまちづくりを行うために、一助を担っていくことを目的に、活動を続けていきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。以上です。

〈山口〉 ありがとうございます。着実に歩みを進められておられると思いますけれども、このまちづくり委員会って、市長から見るとどういう感じのものなんですか。

〈黒田〉 これまでの価値観で市民の皆様が見ると、市がやらせているのではないという、うがった見方をされると思いますが、全く関係ありません。むしろ、私にとっては被告席に座らされるような、市民の圧力団体的な存在です。これは悪く言っているのではないですよ。そのぐらいの目線で、私の市政に対するいろいろな取り組みや事業を検証していただくということは、ものすごい緊張感を役所サイドに及ぼしますし、また、幅広い世代を超えた方々の意見をそこで集約できるということは、新たな事業を構築する上でも非常に有効な戦略づくりになりますので、助かっています。

〈山口〉 大村さん、すごいですね。最近、そういう市民活動を活発にしようということで、行政主導でやっている例はあります。例えば、鳥取県の智頭はすごく有名ですけれども、行政がこれではいかんのではないかということで、住民の中に入り込んでというパターンから始まったのですよ。ところが、今の話だと、市ではなくて、住民の中でそういうふうに、みずからが試行錯誤でいろいろまちづくりを考えて市長と話をしていくというやり方が成功すると、かなりのことができると思います。

〈黒田〉 そうなんです。しかしながら、数多くの住民が意見を出し合うとまとまりもつかなくなるので、地方自治体の基本事項を議決する団体意思の決定機能として有する議会が、住民の中に入り込んで一緒に取り組みを聞くことにより、その意見を議会に反映させることができればと。

今日のこのシンポジウムに議会の方からもたくさん参加してほしかったなと思っています。

〈山口〉 そうですね。実は議会のあり方というのもだいぶ変わっていると思うんですよ。もともと、機関委任事務ばかりの時代は、議会で審議する内容自体がほとんどなかったんですけども、今は本来の議会に生まれ変わって、まちのためにどれだけの議論ができるのかというところで、全国的に議会活動に差異が生まれる状況になっています。よくある議論ですけど、住民との直接対話が生まれると、「議会はあるの？」という話になるんですが、議会は議会で最終決定機関であるわけですから、責任というのはいしかりあるわけです。ですから、むしろ同じように住民の中に入り込んで一緒になってやっていくことで信頼を勝ち得るとというのが議会のためにもなると思うんですよ。

そうしましたら、続きまして、岩崎さんのほうから今の取り組みをお願いします。

〈岩崎〉 ただいまご紹介いただきました、ひらど新鮮市場の参事の岩崎です。現在の当市場の概要は、配付されておりますこの資料に載せておりますので、簡単に今までの歩みをご紹介させていただきます。

平成12年11月に75名の出荷者でオープンをしまして、平成16年に法人化を行い、同年、店舗を新築いたしました。現在13年が経過しております。

その間2回、店舗の増築、改築をいたしました。1回目は、組合員、来客数の増加で店舗がたいへん手狭になって増築をいたしました。2回目は逆に、来客数の減少と、部門的に弱い水産を強化し、集客を取り戻すため、平成25年8月に改築をいたしました。

どこの直売所でも同じですが、地域の特色をより打ち出すために、さまざまなことをいたします。例えば、米です。平戸市の米は、大半が棚田で栽培をされたお米です。そのための一般的な「棚田米」の言葉を使わず、米の出荷者35人の顔写真を張り、それぞれこだわりの米づくりを紹介しています。加えて、白米だけではなく、精米機を導入いたしまして、すり立て米としてのサービスを行っております。工事は2回

とも自力で行いました。

我々のような小さな直売所が加工酒をつくるに当たっては、資金面でたいへん苦勞いたしました。しかし、加工酒によって平戸の特色を活かした競争力のある製品づくりが目指され、店頭に並べられない農水産物の再利用が図られ、新たな事業を遂行することで売り上げや雇用の確保が図られました。さらに、まんじゅう、弁当などの日配品ばかりでなく、加工品により、それぞれのどのような価値を持つ商品に仕上げるのか、その価値を活かすための表現方法、例えば容器、容量、価格の設定、顧客への販売手段、届け方など、それぞれの加工品に対しての販売のための考察も行っております。生産者の方々と契約栽培を結び、生産者には全量を買取るということで、やる気と安心を、消費者の方には、安全・安心を強くアピールいたしております。

しかし、県下でも65歳以上が3番目に多いという平戸市にあって、なおかつ消費人口は減少の一途をたどっている中、市場に出荷されたものを残すことなく売り切るのは困難です。そのため、新鮮市場としては3つの方策を立てております。

第一に、店内にあふれる季節の野菜は、学校給食、観光ホテルやさまざまな施設に、栄養士さんと連携をとりながらご提供いたしております。

第二に、輸送コストが多少かかりますが、毎日福岡市内のスーパーに「平戸の潮風野菜」というコーナーを設置し、出荷をしております。出荷される野菜、加工品には、「長崎平戸じげもんうまかもん」のシールを添付しております。このシールを張ることで売り上げの向上が図られればと、このシールのご支援を行政のほうからいただいております。これからは買いに来る方を待つだけでなく、消費人口の多いところに物を届けることも、地域の中で生き残る、過疎化の中の直売所のひとつの選択肢だと考えます。平戸の潮風野菜コーナーの増設店舗の話も来ておりますが、我々一直売所では、輸送に対するコストの負担をどう軽減するのが大きな鍵となっております。過疎化の中で、元気な地域を構築するための方策のひとつとして、平戸独自の物販の輸送ルートなどの模索を始めることも、そのひとつにあげられるのではないかと私は考えております。

第三番目として、6次産業化への取り組みを始めております。平戸はお茶が日本で最初に栽培されたところですが、そのほかにもサツマイモなどもあります。加えて、「木引かぶ」という、福岡県の芥屋かぶに形がよく似た、先が「く」の字に曲がったカブが、室

町時代から栽培をされてきたという文献が平戸には残っております。室町時代からの木引かぶを今の時代に合う加工品に商品化し、なおかつ、掘り起こした方々の思いが伝わるストーリーが構成された商品にするため、農地利用計画なども含めた木引かぶの6次産業化の認定に向けて、ただいま取り組んでおります。

これまでご説明をいたしました我々の取り組みは、どこにでもある直売所と同じで、大きな基幹産業がない地域で、一次産業の生産者の方が所得向上とつくる意欲を持つことが第一の目的でスタートいたしました。直売所としてできることの許容範囲の中で、さまざまなことにチャレンジをして、前向きな方向性を維持する力を持ち続ける、それが、いつまでも元気な地域づくり、笑顔の生産者がいることのお手伝いになると思っております。以上です。

〈山口〉 ありがとうございます。全量買い取りという話がありましたよね。導入するとき大変だったのではないですか。

〈岩崎〉 いいも悪いも同じ価格でとりますので大変です。値段の差はありますが、うちの加工品に対するものは、ほとんど全量買い取りをしております。

〈山口〉 例えば、大根が何百本も余ったりとかしませんか。

〈岩崎〉 何百本も余らないです。青果で出されるもの以外に、買い取りというのは、大根でいえば、真っすぐなすっとした大根じゃなくて、二股に分かれたり、中が割れたり、そういうのを買い取って、こちらが加工品にするわけです。

〈山口〉 加工するんですね。そうすると、かなりの知恵と工夫が必要になってきますよね。

〈岩崎〉 そうです。でも、もらうわけにはいかないですよ。「これはやるよ」と言われますが、それをただでもらうと、こちらが負い目になります。常に、生産者と買い取り側が対等な立場でやっていきたいと思えますから買い取ります。

〈山口〉 生産者との対話というのを大事にされているんですね。

つくって、そのまま出すというだけではなくて、つくったものに対する愛着ってあるじゃないですか。それに関してはいろいろ葛藤もあるでしょうからね。いっぱい出してしまったら、どうなったのだろうか、大切に使われたんだろうかという生産者の気持ちとかですね。

〈岩崎〉 高齢の方がつくっていらっしゃることも、ひとつの買い取るという要因ですし、福岡に毎日毎日出していくというのも、つくることによって高齢者の元気が保たれているというのがありますので、そのためにつくってもらう。そして、売れた喜びが振り込みになってくるわけですよ。毎日持ってきますので、自分の売れ残った野菜はないということになると、「よし明日も」「これだけ売れたら、来年はもう少し作付けを増やすか」みたいになります。そこが元気を構築していくテクニックだと私は思っております。

〈山口〉 何かわくわくしてきますね。今のお話というのは、いろいろ直売所も増えてきましたけれども、全国のモデルケースになるかもしれませんよね。

〈岩崎〉 いえいえ、そういうわけじゃなくて、増改築するたびにお客様に言われるんですよ。「もうかったばいね」と言われるんですけど、実はすごく借金をしているんです。今でもまだ2つの借金があります。今年改築をしました借金と、前の平成20年度に建てた米の加工所のほうの借金と2つ抱えておりますので、たいへん資金繰りは厳しいです。だけど、弱いところは手を入れ直すという形でやっております。

〈山口〉 今、お客さんの何割ぐらいが市外から来ている方ですか。

〈岩崎〉 うちの85%ぐらいが地元の方です。

〈山口〉 じゃあ、まず地元で愛されているんですね。

〈岩崎〉 はい。まず、日々の食卓に使うのに、ここに来たらあると思うとったみたい。平戸瀬戸市場さんは観光のほうに重きを置かれているかと思いますが、うちの完全に地元密着型です。そのときそのときの地域である行事、例えばお盆やお正月、お寺さんの行事、その辺をきっちり把握してまして、この日はここのお寺のお十夜だとかいうことであれば、それ

に向けた商売をさせていただいております。

〈山口〉 すごい。大村さん、活用していますか。たまには顔見ますか。

早田さんは。

〈早田〉 妻が。

〈山口〉 ちゃんと一緒に行ってください。(笑)
それでは、籠手田さんをお願いしたいと思います。

〈籠手田〉 先ほどもお話したように、私どもはボランティアガイドの組織として、NPO法人平戸観光ウェルカムガイドとして今運営しています。

実は今、ボランティアガイドシステムというのは全国にたくさんできていまして、平戸でこのボランティアガイドが立ち上がったのは随分早いんです。1999年です。そして、2004年にNPO法人にしました。ガイドの組織をNPOにしたのも早いと思います。ただ、会員数は今登録している人が42名、日々活動に参加してもらえるのは20名程度だと思います。

私どもは、実は今、建物は別として、完全に独立して運営をしております。通常のボランティアガイド組織ですと、行政の観光課だとか、観光協会からの依頼でガイドを派遣することが多いのですが、我々は年中無休でその借りた場所をあけて、受け付けは、電話、ファクス、ウェブでの受け付け、あるいは直接申込み、全て自前で受けております。

もうひとつは、最近、観光の形態が非常に変わってきました。先ほどもお話があったように、大型団体から個人のほうへシフトしています。個人の観光というのは、1週間前から予約してなんていうのはほとんどなくて、天気がいいから今日行ってみようかという方が多いんです。特に福岡や近県の人たちは、前々から予約なんていうことはめったにないわけです。ですから我々は、一応予約してくださいとは書いていますけれども、予約の必要はなくて、当日も受け付けております。これが、ほかのところとは非常に違っています。当日電話がかかってきたり、あるいは直接ガイドステーションにお越しになったりして依頼されます。もちろん、ガイドは常にたくさんいるわけじゃありませんので、そういうときには、一番近くで動ける人を電話で探して、5分なり10分なり待っていただくんですけれども、それでも当日受け付けに対応をしています。今まで2年間やってきて、一度も断ったことはありません。全部受けました。



これが、個人だけではなくて、最近は団体からもあるんです。昨日もあったんですけど、何とか旅行会社から電話がかかってきて、これから平戸へ行くんですけども、ガイドをお願いできませんでしょうかと。それから、もうひとつは壱岐や五島など、この辺は離島がありますが、天候が悪いと行けなくなるわけです。ところが、パッケージですとどこか行かないといけない。そういうときの代替で平戸へ来るというケースもあるんです。そうすると添乗員から、どこか探してるから、とにかく平戸で受けてもらえないかと。それも受けています。最近結構そういうのが多いんです。

だんだんにそういうことが伝わりまして、ここだったら受けてくれるというので、統計もとっているんですけども、結構増えております。案内件数が、今1年間にだいたい1,000件、人数で1万5,000人ぐらいです。当日受け付けも相当の数に上っていますので、そういうことでお客様の目線に立った運営ということを常に考えています。

もうひとつ、先ほど少しご紹介しましたけれども、我々は民間ですので、近くに市の観光案内所もありますが、とにかく積極的に声かけをしています。周りにいたら「いらっしゃいませ」と言ってお声をおかけして、挨拶をして中に入ってもらって、「どうぞお座りください」というおもてなしをしております。それから、雨の日だとか、また、「勝手に行ってください」とガイドもつけないで放すツアーなんかもあるんです。あるいは、バスガイドさんが回ることもあるんですけど、どこへ行っていいかわからないし、疲れたから行きたくないという人は、ガイドステーションでお休みいただいて、その間にいろいろなお話を聞いたり、長くなればお茶を出したりしております。もちろん、安い100円で飲めるコーヒー自動販

売機も置いています。

それから荷物の預かりをやっております。これはたいへん好評です。荷物持って買い物や観光をしたくないという方の分を全部お預かりしています。結構スペースが広いものですから、たくさんお預かりすることもできるんです。実は、観光案内所のほうで「あそこへ行けば預かってくれる」と言うので、そっちらから回ってくることも多いんですけども、ひどいときには、部屋いっぱいになるくらいにお預かりすることもあります。これはたぶん、行政ですと問題がいろいろあって、盗難があったりしたときのことを考えると、とても受け付けられないかもしれませんけれども、我々は民間ですから、そのときはそのときということで、今までに事故はありません。お名前と、念のために携帯電話の番号だけ頂戴して、お預かりをしております。

そういうことで、お客様の目線で、ご要望についてはとにかく何でもお聞きして、例えば、こちらから旅館に電話して迎えに来ていただいたり、そういうことも、お客さんに「こちらの番号におかけください」じゃなくて、私どもの電話でおかけします。そういう目線でやっています。

先月の25日に、長崎県の総おもてなし運動推進大会というのがあったんです。実はそこで認められて、会長賞を受賞いたしました。我々の活動を見ていただいている方はいるということで、たいへん我々のモチベーションアップになりました。

ただ、ガイドの数が足りないんです。実は、平戸検定を始めた理由もガイドを養成するためで、検定を受けていただいた合格者、特に中級、上級に合格した方に実際の研修をしてやろうとしていますが、なかなかこれが増えないんです。私もUターン組ですが、半分くらいはよそ者です。Uターン、Iターン者が半分です。地元の方は、検定までは受けても、なかなかガイドになってくれない。そこが悩みで、なんとかならないものかと思っています。それから、平戸検定ですが、我々はガイドですから当然なんですけれども、できたら市民全員が受けていただきたい。先ほどの平戸高校じゃありませんけれどね。

せっかく市長さんがいらっしゃるのもうひとつお願いしたいのは、市の職員の方にぜひ平戸検定を受けていただきたい。平戸市の職員は、いろいろなことでよその人と接触する機会が一番多い方たちなので、ぜひ受けていただきたいなと思っています。次回は来年2月16日、日曜日にやりますので、ぜひお受けいただきたいと思いますし、お知り合いの方でガイ

ドになりたいという方がいたら、ぜひご紹介をいただきたいと思います。

以上のようにやっております。

〈山口〉 観光振興にしても地域振興にしても、外からの人に刺激を受けて活性化するという事例はよくありますが、そのときに、市民の皆さん方だけで一緒に踊る雰囲気をつくるというのはなかなか難しいです。そこです。

市長、平戸市民の頑張らないといけないというモチベーションというのは、ふだん模索されたりしていますか。

〈黒田〉 まさに、そういった地域の魅力や資源、可能性を見直して、これを誇りにし、自慢できるようになっていただくように呼びかけてまいりました。ただ、平戸の皆様特有の奥ゆかしさなのか、自虐性なのかはしませんが、「いやいや、平戸はそがんだしたことはないよ」と必ず否定されます。では、実際に今まちづくりやっている方は誰かということ、若い世代と、Uターンされた都会を知って帰ってきた方です。

この国は、よくも悪くも、団塊の世代があらゆる力や価値観、パワーを国に反映しています。地域もそうです。私は53歳なんですけれど、団塊の世代は、私より10か15上の世代です。この方たちは日本の高度経済成長を享受してきて、その恩恵を受けてきた。全て都会型の考え方が正しくて、田舎はマイナスなんだというのが、残念ながら、しみ込んでいます。しかし、それを広げないでほしいと思うんです。自分の息子にも「帰ってこんちゃよか。都会でやれ」と言って、「おまえの息子どうしよ」と「東京で頑張りよるとよ」と自慢するんですね。「博多で気張りよるとさ」で



す。ほんとうは、10年後には、「まだそがんとおとこにおると。はや帰ってこらせ。おまえの息子は親不孝もんなやな」というぐらいになってほしい。都会にいて、都会の価値観でいることが何かすごくステータスが上だという世代があります。

一方、残念なのが、都会にいての方が嫌々地元に戻らざるを得なかったケースです。個別にいろいろありますが、彼らは戻ってきて悪口を言うんです。「ここは病院もたいした診療科がなか」「子育ての制度がない」とか言うんです。でも、ほかにいろんないいところがあるでしょう。都会にない、いいところがあるはずなのに、悪いところだけ見つけてぱつと言うものだから、それに携わっている人の心が折れてしまうんです。要するに、褒め合う、あるものを高め合うという意識を変えないと、まちづくりって難しいのかなと思います。いつまでも、都会がいいんだ、都会の価値観でなければ成功しないんだというものの考え方だと、いろいろな方が「平戸いいじゃないですか。すばらしいじゃないですか」と言っても、「いやいや…」となるんです。

だから、ぜひ岩崎さんも、「もうかってるやろ？」という問いに対しては、もうかってますよ、どんどん買いに来んねというぐらいになってください。全量買い取って売ってあげるって、こんなすばらしいことないですよ。「こんな曲がった大根は金にならん」という控え目さではなくて、これを金にかえてくれてありがとうという勢いをみんなが持ち始めれば、まちは変わると思うんです。

私は企業誘致は田平には持ってこようと思っていますが、平戸本土は天候等に影響されることから難しいのかなと思っています。だから、平戸本土の工業団地は全部メガソーラーの誘致に取り組みました。「ソーラーパネルは雇用ば生まん」と言う方もいらっしゃいますが、使用料と固定資産税が入ってくるんですから、何もしないよりいいじゃないですかという開き直りが大事。光と影があるので、その小さな影の部分を大きくして、「雇用ば生まん。何やありゃ」と言うのではなく、そういう足の引っ張り合いはやめて、手をつなぎ合う、足を握らんで、手を握るというほうにシフトしていただきたい。

それと、今アベノミクスって言っています。相変わらず「ものづくり」です。早田さんも、ものづくりって言いましたけれど、それは今までにないものをつくるのは、かなりいいと思います。でも、今まであったようなものは、「買ってどうするの。何買うの」という話です。電化製品また買いますか。狭い部屋に冷蔵庫

が何台もあってどうしますか。リニューアルはいいですよ。でも、買うものは限られてきています。だからものづくりも限度がありますよ。それよりもっと違う価値があるはずですよ。要するに、ものづくりに執着すると消費者は安いほうに流れます。労働賃金の安いところに工場が行きます。「もの」よりも「価値」が高いものにみんなの目が向いてるんです。しかも、そこでしか味わえない価値。我々田舎が自慢できるものは、空間であり、優しさであり、要するに価値の深みですよ。ここをどう売るかというときに、自己否定しないでほしいとお願いしたい。意識を変えるって些細なことですけど重要なことです。しかも難しい。4年やってもまだまだそれが行き渡らないので、これからも諦めずに、どんどん呼びかけていきたいなと思っています。

〈山口〉 このデータは、出すか迷いましたが、お見せします。

これは、居住者が地域にどれくらい誇り・自信を持っているかというデータなのですけれども、平戸はかなり低いんですね。住んでいる人間が、自らの地域に自信・誇りを持っていないところというのは、先ほど言いましたように…。外から見ると平戸はすばらしいまちですよ。今、ほんとうに復活して、徐々に雰囲気が出てきているので、まず住んでいる皆さんが地域を誇りに思うことがとても大事なことです。

今回のメインテーマには、「そして誇り」と最後についていたと思いますけれども、それがきわめて重要で、心の空洞化の問題と申しましよるか、過疎化の問題点は一番がそこだと思います。自分たちを卑下する。もともと日本人というのは、戦後、半分以上が農林水産業に従事していたのですもんね。高度経済成長期に太平洋ベルト地帯に工場ができてというのはつい最近の話で、もともと日本人というのは万遍なく地域に居住していたわけです。昨日の話もそうですけれども、徐々に今、少しずつ本物の価値というのに気づく、特に若者を中心にそういう人が増えている状況なので、これから、平戸が本来持っている価値を、みんなが、特に中から認識をして、外に出ていくということが大切なのかなと思います。

途中ですけれども、今までの話の中で、フロアから聞いてみたいこととかありますでしょうか。ご意見とか。あれ、大台町の町長さんがおられます。町長、ひとつお願いします。三重県の大台町というのはすばらしいところですよ。

〈尾上 武義（大台町長）〉 三重県のほうからやってきました、大台町長の尾上でございます。今日はありがとうございます。

今、たいへんうらやましいなと思いながら、ずっとお話を聞かせていただいております。私ども大台町は高齢化率が37～38%なんですけれども、平成18年に、旧の宮川村と大台町が合併して、今の大台町になっております。この旧の宮川村にいきますと、高齢化率が45%ほどです。もうひとつ前の旧村が1地区あるんですけれども、そこは70%です。こうなると、行政が動かないと、地域からは興ってこないという状況なんです。今の平戸市さんのいろいろな活動を聞かせていただいて、いろんな形、いろんな分野で、皆さんが頑張っておられるということでした。そういう意味では、市長さんがたいへんうらやましく思いました。

私どもも、いわゆる行政主導から、町民の皆様との協働のまちづくり、それがほんとうに大事だなと思っております。そこには苦勞もありますけれども、いろいろな誇りとか自信といったものが芽生えてくるんです。しかし、行政主導でやっておりますと、それがなかなか出てこないということがありますので、何とか切りかえていきたいという形でやっていて、今後もっとしっかりやっていかないといけないと思った次第でございます。

いろいろとお聞かせいただきましてありがとうございます。



〈山口〉 ありがとうございます。

平戸市民の皆さん方で、誇りとかということに関して何かございませんか。平戸の方は奥ゆかしいのでしょうか。あ、はい、お願いします。

〈質問者〉 平戸市生月町いきつきまちから参りました。

自分は中学時代まで平戸をすごく出たいと思っていました。都会に行きたいとばかり思っていました。でも、離れて、周りの人が何でこんなに平戸ってきれいだとか、いいって言うんだろということに大学時代に初めて気づきました。考えてみたら、お店がないとか、遊ぶところ——ゲームセンターやカラオケとかがないとか、自分は中学時代ずっとそういうふうに思っていました。例えば買い物に行くにしても、佐世保や松浦とか佐々とかにどんどん出て行くという感覚があるのではないのでしょうか。

〈山口〉 でも今は違うのですよね。徐々に誇りを持ちつつあるのでしょうか。

〈質問者〉 はい。離れて初めて、まず自然が、お話にあるようにほんとうに豊かだということや、4月に戻ってきたんですけど、それから近所の人たちともすごくつながりがある。お寺なんかに行ったとしても、もう皆さんが、「ああ、あその〇〇〇〇さんね」って知ってくださっているというのがすごいなと思って、今は自分は平戸をすごく誇りに思っております。

〈山口〉 まるで仕込んでいたようなご意見をありがとうございます。

今まで都市の人も、じいちゃんぐらいから田舎から出てきたとか、結構田舎に縁があったんですけども、徐々に時代とともに、じいちゃん世代も東京・千葉・埼玉出身の人が増えて、日本人も変わってきました。そういった意味で、今どきの子は、自然や本物であることへの感動があるんです。今は潮目だと思うんですよ。そのときに、平戸に住んでいる皆さん方が、「いや、つまらん、つまらん」って最初からシャットアウトすると、全く地域の魅力を失ってしまうので、このやり方をどうするかというのはすごく大事です。

籠手田さん。外からお客さんが来て、平戸のどういふところがいいとおっしゃいますか。一番感動してもらえるポイントはどこでしょうか。

〈籠手田〉 日本人の観光客の方は、景観と落ちついたたたずまいですね。特に、平戸の港のあたりは山に囲まれていて、いろいろな要素がある。お城あり、お寺の三重の塔あり、教会あり、松浦史料博物館もある。それから、非常に静かで海がきれい。都会か

ら来た人は、この港の海のきれいさに感動されます。だいたい港の海というと、どす黒いというのではありませんけれど、なかなか底まで見えないです。ところが、平戸の海はほんとうにきれいです。



それから、外国からの観光客の話ですが、あるときイギリスの旅行会社から、実は平戸へお客さんを連れていきたいんだ、どういうところがいいかという話がありました。そして、直接ではありませんけれど、日本を担当している社長が来まして、私も一緒に回って、コースを決めたのが、三浦按針（ウィリアム・アダムス）ゆかりの「将軍の道」ツアーです。これが10年経ち、まだ続いている。だいたい多いときは年間に14回来て、合わせると2,000人くらい来られているんですね。

イギリス人が多いんですけど、英語でガイドしますから、世界中、特に英語を話す国々の方、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、香港などから来られます。一般の観光であって、目的があるわけではありません。2週間の一般の日本観光ツアーで、成田へ降りて、東京に3泊ぐらいして、箱根、京都、それから長崎、最後に平戸で、平戸から福岡へ行って、そのまま飛行機で帰ります。2週間のツアーの中で平戸に2泊3日を割いてくれるんです。日本人の観光客よりよっぽどゆったりと平戸にいて、何に感動するかというと、要するに日本の原風景なんです。東京から来る場合には観光地をずっとたどってきていますので、新幹線から見える風景もそこそこ都会化しているところが多いわけです。そして、平戸へ来て、本当の日本の自然がわかるというんです。平戸の島は8割が山です。常緑樹です。こういうところって珍しいんです。青々とした山が広がっている、海がある、きれいな浜辺がある。もちろん、そこに歴

史もあるんですけど、そういうものよりも、まず田んぼ、棚田です。田の風景は四季折々変わりますけれど、彼らはそういうものにほんとうに感動します。

生月にも行きまして、島の館には捕鯨のコーナーがありますので、たまに反捕鯨者がいまして、入らないという人もいます。だけれども、食事にも鯨を出したりして文化として説明すると、ほとんどの人が「ああ、そういうもんなんだ」ということで、捕鯨に対しても理解してくれます。それから、なんで田んぼが重要なのか、環境問題についてもいろいろなお話をします。

そういうことで、日本の、いわゆる昔からの生活そのものが文化として残っていて、全部それが平戸の中で体験できるということに非常に感動して、14日間の日本旅行で平戸が一番よかったという人がいるんです。そういうことを言うと、「いや、そんなことは」と言われるのですが、これは本当なんです。

もうひとつは、外国人を日本へ呼ぶことは日本の大きなテーマで、国も今2,000万人とか3,000万人という目標を設けて、一生懸命やろうとしていて、どうしても中国、韓国、台湾、この辺の東アジアが一番多いんですが、私の経歴からなのかもしれないんですが、欧米人にもっともっと日本をPRすべきだと思っているんです。なぜかという、欧米の人はたいへん洗練された旅行をしていて、世界中のほとんどを回っているわけです。そして、最後の目的地として、日本を選ぶ方が多いんです。なぜかという、日本は高いというイメージがまだありますし、残念ながら、外国ではなかなか日本を売る商品が少ないんです。ですから、どうしてもほかのところへ行く。世界にはいろいろなところがあるわけですからね。

日本へ来た人に感想を聞くと、日本は思った以上によかったって言うんです。何がよかったのって聞くと、きれいだ、親切だ、そういうことはもちろん皆さん言いますが、こういう昔ながらの風景が近代化された国の中にあり、お祭りが至るところに残っている、そういうものに非常に感動されて、もっと早く来ればよかったという方もいるくらい日本のことを好きになって帰ってくれます。JTBでもいろいろLOOKだとかでやっていますけれども、なかなか10年同じコースが続くというのは難しく、このツアーが今も続いているというのは平戸にそれなりの魅力があるからだだと思いますし、自信を持って世界にアピールできます。

もうひとつ、景観というのはものすごく大事です。平戸は3年ぐらい前に景観条例をつくったんです。

平戸市全域をカバーしている。これはたいへんよかったですと思っています。

〈山口〉 ありがとうございます。

スクリーンをお願いできますか。これも、別に示し合わせたわけではないですが、見ていただきたいのです。

これは、来訪者と居住者に対して自由回答してもらって、どういうイメージか、何に満足したかをキーワードで見たものです。平戸は下から3つ目にありますけれども、居住者は、魚、海、新鮮、平戸牛、平戸城です。訪れた人が非常に平戸に満足したキーワードは、海、教会、魚、景色、新鮮です。何となく今の話とオーバーラップしますね。ですから、住んでいる人間と、来た人の感動はポイントがずれているのですね。だから、平戸の人から見て、どうってことのないこの山と海の景観だとか、そこに教会があることに「すごいな」って感動する。こんなところがあるんだというか、急に出てくる景観というか。だから、このあたりをもっとみんなで共有しないとイケません。

市長、どうやったら、市民の皆さん方が地域に誇りを持って、方々で自慢できるようになりますか。



〈黒田〉 もうひとつ、平戸の魅力は人柄だと思います。とても優しく、真面目で、親切ですよ。そうはいながら、島国だったものだから、よそから来た人を警戒しますよね。この間、私の同級生から電話がありました。「他県ナンバーの車がたくさん来よる」と言うんです。「うん、それで」と私が言うと、「治安は大丈夫か」と。そうじゃないでしょう、喜んでくださって言いたいんだけど、警戒するんです。でも一旦ドアから入ってくると、すごくもてなすんです。その心豊かさというのはすごく各市民にあります。

そこで、もう既にやっていますけれども、大学と連携し、受け入れることで、仲よしになっていく機会を増やしたいと思っています。地域づくり、地域経営、それから文化の伝承、あるいはいろいろな大学のテーマになるような介護福祉の分野で、学生が現場に入る。若い人が地域に入り込むことで、何らかのいい意味での化学反応が起こるのではないかと期待しています。大学側にとっても、座学で頭でっかちの勉強をするよりも、地域に行き、こんな現状なんだ、こういうことに困っているんだという実際の研究ができますでしょうし、受け入れる側も、若者と接して、感動を共有して、「おばあちゃん、また来るね」「ああ、おいで」という、それこそ肉親以上の親しみが、そこにドラマとしてでき上がることを期待しています。

〈山口〉 今、域学連携で、全国の自治体の半分くらいが大学との交流をしています。特に、平戸は、そういった意味では非常にチャンスだと思います。

例えば、群馬県の神流町でトレイルランという山の中を走る競技をやっているんですけど、これ、まちぐるみでやって、参加賞とかを町民が全員でつくるんですよ。それで、町民の家に住んで、もてなしをしてから、町民の自分のまちに対する誇りがぐっと上がったんです。つまり、外からのいろいろなことに町民が一緒になって接しながら、若い人と会話ができてというような構図をいかにつくれるかだと思うのです。ですから、町民に「誇りに思え」って言うだけではなくて、一緒にいろいろな取り組みをしながら、毎日がすごく楽しくなったねという雰囲気をつくっていく。

早田さん、これからどうですか。今までのいろいろな話を聞きながら、方向性としてはどうでしょうか。

〈早田〉 来訪者の方が「人」が魅力だったって言っていただけるようなまちになるといいなと思うんですけど。まさに、そうだと思います。先ほど高校生が出たし、今、大学生の話が出ましたが、今の若い人たちというのは——私もまだ若いって思っているんですけど、夢とか希望が少し欠けているところがあるのではないのでしょうか。地方の人たちもそこら辺が欠けているところがあります。その辺を改善というか、もう少し夢を持てるような、目線を高くできるような人たちがたくさん出てくると、まちが輝いてくるのではないかなと思います。それができるかできないかで、地域間の差別化といいますか、差がものすごく出てくるのではないかなと私自身は思っ

います。

〈山口〉 大村さん。

〈大村〉 私は、農業法人ということで一次産業をやっているんですけども、平戸市は高齢化率が33%ぐらいなんですよね。そういう中で、平戸は一次産業従事者が結構多くて、若干二次産業が弱い。これは今後の大きな課題になってくるんでしょうけれど。さっき海がきれいと言われたんですけども、山がきれいでないと海もきれいじゃないんですよ。そういう意味で、あわせ持った資源というのが平戸にはあると思います。私たち、そういうところに住んで人間がどう変わっていくかということを重点的に考える。

今、平戸市では、先進地をいろいろ視察して、頑張っている行政の体質をまねようとか、勉強しようとしているんですよ。そういうところで話を聞いたときに、「本気で平戸市はやるんですか」と言われたことが1回あるんです。「大変なんですよ。結局は住民の意識を変えるということまで必要で、5年、10年じゃ変わらないんですよ」という話をされていました。

私たちの生産世代が住みにくくなるという環境が確かにあります。平戸市にも、今から大型店舗、大資本の店舗というのが入ってくるといううわさがありますが、そういうところには行くなとは言わないです。確かに便利ですから行っていい。しかし、ローカルファースト的な考えを住民に持ってほしい。例えば、自分たちが住んでいる小売店が1軒なくなると、マヨネーズやコショウがなくなったときに買い物に行く場所がなくなるんですよ。これって自分たちの首を絞めるんですよ。地域の商店とか商品を選択肢として頭に入れてもらうだけで生き残れる。その商店が5年、10年生き残れば、私たちの住みやすい環境もできる。それで、地域のコミュニティがもっともっと活性化していけば、我々も働きやすくなるし、住みやすい環境になるんです。そういうのをつくり出すために、長い間、私たちはこういうまちづくりの活動というのを一生懸命やっていて、民と官の歯車の一助になりたい、少しでもお役に立ちたいということを考えています。

一次産業というのは外貨を獲得して内需をする面もあるので、今からの平戸市をもっと魅力あるものにできるのではないかと考えています。



〈山口〉 ありがとうございます。

思い出しましたが、私が長崎県の総務部長として予算をつくるときに、先進地視察という言葉に対して参考県調査というふうに変えたのですよ。しかも、予算をつくるときに、九州で何番目かというのがチェックポイントだったのです。それはどういうことかということ、真ん中でいようってことですから、自分たちはリーディングケースになれないってことじゃないですか。そういう意識の問題ですよ。

自分たちが先進地にならなければいけないわけで、例えば今、長崎県はDV(ドメスティック・バイオレンス)対策においては、長崎モデルをつくって、日本でもトップレベルです。これはそんな意識のやり方だったらできないわけです。その辺、何となく、いつの間にか現状維持で満足するようになっていないかチェックが必要ですね。

大村さん、まちづくりでも、そういうのをお互いチェックし合うというか、どうでしょうか。

〈大村〉 本来は、私たちのローカルマニフェストサイクルというのは、表立っては、首長の施策を検証していきましょうということなんですけれども、実際はそれに触れながら、住民の意識がレベルアップしていく、それに触れることで行政も市民もレベルアップしていくことが根底にあるんですね。

〈山口〉 まさにおっしゃるとおりで、さきほど、例のマニフェストの話がうかがっていて、それが内向きな作業だったら、どれだけの意味があるんだろうかと思ったわけですよ。それを通じて市民参加ができて、自分たちの中でまちづくりに興味を持つところに目的があるわけでしょう。そうだとすれば、すばらしいなと思います。

平戸の商店街ってすばらしいじゃないですか。私、大好きで、昔は何往復もしていましたけれども、変わりましたか。現状はどうなっていますか。岩崎さん、商店街はどうですか。

〈岩崎〉 商店街は寂しいです。申し訳ないですけども、通る方が少なくなったというのと、車社会ということで、駐車場が少ないから路上に停めてのお買い物というのがなかなか難しくて。

空き店舗を利用した国の対策事業がありますよね。先日も木引田町の商店街のほうから、あれを使って新鮮市場出てくれんかというお話があったんですけども、駐車場の問題とか、経費の問題とかがありましてお断りさせていただいたんです。

〈山口〉 商店街も、上から面的にやろうとしてもなかなか難しく、ひとつひとつの店の魅力が重要ですよ。まさに、起業者というか、ちょっとした小店でもいいですけど、そういう人が何人出てくるかというところに地域力が試されるような気がします。

籠手田さん、どうぞ。

〈籠手田〉 岩崎さんの話とは反対になるかもしれませんが。

平戸の商店街は、江戸の古地図に載っている全くそのままなんです。これは非常に誇るべきもので、実は、平戸のあの曲がりくねった商店街は1キロくらいあるんです。空き店舗も私は意外と少ないと思っているんですよ。例えば、お魚屋さん、お米屋さん、金物屋さんという専門店が残っている。そういう商店街ってほとんどなくなっているんです。それと、通りにはコンビニが1軒もない。今はどこにでもコンビニがありますから、それも珍しい。昔ながらのそういうのがまだ残っているんですね。

私は逆に、駐車場が多くなったなと思っていて、空き地が全て駐車場になるわけです。これは毎回言っていますが、何とか大通りを歩行者天国にして、歩いて買い物ができるような商店街につくり直すと、逆に人は戻ってくるのではないかと。

もうひとつは、今は観光客に対する目線が全くないんですけども、観光客が好むような、ちょっとした小物でいいですから、若い人たちのワゴンセールでもいいですから、あの辺に並べて、見ながら歩けるようにしたら、本当にすばらしい商店街になり得るって思っているんです。今は景観の修景作業でい

ろいろ両論ありますけれども、確かに見る限りきれいになっていますので、歩くことを非常にお勧めしたいと思っています。地元の方に観光客目線で商売をする人がもう少し増えてくると、もう少し活気づくのかなと思っています。

〈山口〉 そうですよ。先々週、私は、豆田という商店街に車を通すかどうかというテーマもあって、大分県日田市に呼ばれました。これこそまさに地域でよく考えればいい題材じゃないかと思うのです。豆田地区って、皆さん方ご存じのとおりすばらしい場所ですよ。でも、車がびゅんびゅん通るので雰囲気は台無しにしていますけれども、ただ、住んでいる方は、どうしても動線上、車が不可欠だということで、まさに侃侃諤諤でやりましょうという話だったんです。

私は平戸の商店街はすごくポテンシャルが高いと思うし、まだいい店が残っています。しかも、海に向かって、岬に向かって走るような商店街というのはなかなかないですよ。そういった意味で、4年前から平戸は地域資源の宝庫だと言っていますが、リップサービスじゃなくて本当に宝庫なので、後はみんなどう活かすかということですが、少しずつ変わってきている鼓動を感じます。

早田さん、どうですか。

〈早田〉 商店街についても、商工会議所の青年部で、店主の皆さん全員の調査をさせていただきました。200店舗ぐらいのうち100店舗ぐらいから回答いただきましたけれども、さまざまな問題点をいただきました。

要は、10年後、何店舗残るんだろうかと我々は予測をしましたが、半分ぐらいになるんです。それはなぜかという、跡を継がせるかどうかという問いに対して、6割ぐらいが後を継がせないという回答なんです。非常にショックでした。将来的な物事を考えていくにあたって、そこら辺の意思の疎通というか、その改善がまず大前提として必要かなと思っていて、できるだけ若い人にもう一度戻ってきてもらって、何か興そう、起業してもらおうと考えています。それは別に跡継ぎでなくて、ほかから来ていただいてでもいいと思うんですよ。

おっしゃっていただいたように、細長いあの商店街で、歓楽街がほんとにあるわけでもなく、ぽつぽつと万遍なく商店が広がっているというのは私自身も魅力だと思います。あそこで、通りを全部歩行者天国に

してやる食を主にしたイベントを毎年やっていただいていますけれども、非常に好評で、非常にたくさんの方に喜んでいただいています。これだけ食べ物があるのかと思うぐらい、本当に資源がたくさんあるのではないかって思っていますし、ポテンシャルはものすごく高いのではないかなと思いますので、どんどん外部から来てもらうことも考えながらやらないといけないのかなと思っています。

〈山口〉今日は、JTBの楓先輩がそこにいるので、JTBの話を少しします。

これはJTBの数年前からの新しい商品で、「地恵のたび」といいます。今回のメインテーマは「知恵」ですけれど、これは「地恵」です。新しい旅の形ということで、普通、旅行商品というのは、今までは発地型で、東京とか出す側でつくっていたのですけれども、むしろ受け地で商品づくりをしようというものが着地型です。東大阪が今一番売れている商品なんですけれども、ものづくりの現場に行って、いろいろ視察して、体験談を聞いたりという、それ自体が非常に魅力なんです。



法人の商品で、教育旅行とか企業の視察などに活用できます。昔は物見遊山のバス旅行で、温泉に入って、酒飲んで騒いでみたいな感じだったかもしれませんが、今売っている商品は、例えば、徳島の上勝、奈良の天川、熊本の山鹿、真庭、智頭、海士、夕張、まあ夕張は財政破綻から再生に向けてという商品で意義が違いますけれども、それぞれいわゆる地域振興的なビッグネームです。そういったところを見て、いろいろな体験談を聞こうというものなんです。

平戸はこれだけいろいろなものがあるし、JTB

出身の籠手田さんもいらっしゃいますので、いずれこういうものを平戸のほうでつくる、プログラムを考えていくという手もあると思います。世の中は大きく変わっていて、受け手側のほうでやる方がいいと思います。今までは、市長に頼んで、補助金とってこいとか、客連れてこいとか、陳情行政一本槍の面が強かったりしましたが、それでは少しもよくならない。そういう時代の流れを市民の皆さん方がしっかり感じて、みんなで盛り上がるということ自体が自分たちの誇りになると思います。それがうまくいっているかどうかとところが大きな分かれ目だと思うんですね。

岩崎さん、どうですか。平戸は今後うまくいきそうですね。

〈岩崎〉私は、第一次産業をもう少し元気にしていかないと、観光だけ、人が来るのを待っているだけの地域おこしは難しいかもわからないなと思います。もう平戸でやっているものもありますし、例えば、私が一度視察に行った豊後高田の「春そば」「秋そば」は、行政と地域の方とが一体になって、つくったおそばを全国的に売り出す、また、そばの職人さんを地域で認定して、来た方に召し上がっていただくというプロモーションをしています。

平戸市も今から行政サイドの方々と農業者が話し合っただけであればいいかと思いますが、観光ばかりではないと思うんです。観光に携わっている方の元気さもいりますけれども、それを支えていく消費能力がなかったら外から来る方ばかりがお金を落とすというまちづくりでは、長続きしないと思うんですね。それよりも、内からお金を出させる、出すゆとりができるように、第一次産業の構築も見直していただきたいな、農業のほうにも視線をいただければなという思いがあります。

〈山口〉何かどれかってことではないと思うんですよね。それぞれの分野で、それぞれ活躍する人がいるということだと思います。

それと、何となく先ほどからご理解いただいているかと思いますが、観光もだんだん地域振興に近づいているんです。要は、みんな本物の地域に行きたいわけです。住民の皆さんも輝いていて、まちが活性化しているところに向かっていくわけです。ですから、観光という言葉がどうなのかなというところがあって、つい観光と言うと、若干物見遊山のイメージが出るのかもしれませんが、もう少し

本当の意味での光を観に行くという本来の観光に今、近づいている感じがするんです。

地域振興にも交流が必要だということで、キーワードがそれぞれ「交流」ですから、だんだん観光振興と地域振興が近づいてきて、県によっては今、観光課と地域振興課の両方が同じ部になっているところもあります。その辺の流れといったことを考える。

それと、岩崎さんも本当にご苦労されていると思いますけれども、何かやるときって必ず失敗とか試行錯誤がつきものだし、言い合いもある。でも、それを当たり前のこととしてみんなで納得してスタートしないといけないと思います。今までと違うことをやるわけですから、絶対ハレーションが起こるに決まっています、それも含めて楽しもうということを経験的に示し合わせてからやれるかどうかです。あとは、人の悪口というか、前に出る人間が少なかったりすると引きずりおろされるという面がありますが、前に出る人をみんなが賞賛できるかどうか、「おお、よくやったな」という雰囲気をつくれる地域かどうかということが大切です。年配の方々が若い人たちの取り組みをいかにうまくバックアップして、ほほ笑ましく見ていただけるかということが実は大事ですよ。いかにこれからの世界に新しい形をつくっていくかということだと思います。

さて、フロアの皆さん方からは、お願いします。

〈質問者〉 大島から来ました。

ふだんは重要伝統的建造物群保存地区の歴史的なまち並みのことと、それからスギ花粉の避粉地、主にこの2つのことを通して地域活性化について仲間と取り組んでおります。過疎と言われますけれども、地球人口100億のときに田舎は輝くという思いをどこかに持ってやっております。それから、本物の時代が来たんだろうと思います。人間、生物として、都会だけではやっていけない、そういう時代だろうと思います。

去年の4月に九州農政局の方がお見えになりました。自分たちが直接地域に入って、その地域の新たな可能性、付加価値、そういうものを見出して、専門家と一緒に施策化したいというお話をいただきまして、私たちがやっているその2つのことも、従来ではなかなか見えなかった新たな可能性ではないかなと思ってやっております。公益性のある活動としてやっていますから、当然NPOを受け皿としています。

一方で、市長さんにはお願いですが、市のほうでは、

「ひと 響きあう 宝島」「官民協働の強化による地域の活性化」ということを標榜されております。これをさらに実効あるものにするためには、結局は「人」で、ひとつのことを官民両方からやっていくという場面が多々ありますから、顔の見える人間関係をあわせてつくっていくこと、これが今後の鍵であろうと思います。結局、一番の地域資源というのは人ですよ。そう思います。

市長さん、よろしく願いいたします。私たち本当にそう思っています。失礼しました。

〈山口〉 何か、最後私がまとめようとしていたことを全部しゃべってしまったような気がしますけれども。(笑)

「人」ですよ。市長、何かコメントはありますか。

〈黒田〉 今の最後のところは、人事異動をあまり動かさずに固定化してくれとおっしゃっているのかなということだとするならば、もちろん市役所、行政職員も、ゼネラリスト——どんな分野にも長けた人間になりたいという人間と、スペシャリスト——私はこの専門分野で市に貢献したいという人間、この両方を採用し、育成することで専門性を高めていただきたいと思いますし、行政はある意味市民が主役で、我々は脇役に徹するという役割分担の中でチーム形成ができるように心がけていきたいと思っています。

それと、岩崎さんが、先ほど商店街が元気なおっしゃった。一方で、商店街の魅力が高まったという意見もある。この差は何かというと、早田さんの数字にあらわれているんです。要するに、子供に跡を継がせないという、その諦め感なんです。意外と平戸市内も、農業にしろ、漁業にしろ、商業にしろ、二代目が継いでいるところは伸びているんです。実際伸びています。諦めているところがそのままなんです。商店街の、よくて危ういところは、行政と病院と銀行があるので、少なからず人が集まる仕組みになっていますが、土日とその機関が閉まると、シャッターまで閉めちゃうんです。これが観光の人たちはがっかりするところなんですよ。今こそもうけようという若い世代はシャッターをあけてやるんですけど、諦め感がそうさせているのかなという課題があります。

もうひとつは、そういう情報を共有すること、いろいろなものに好奇心を持って取り組むことが必要で、やっぱり情報なんです。そのときに、いわゆる情

報を発信しているのかといったら、発信しているんです。結構やっています。受け手側、皆さん市民側がどんどんパソコンや携帯、スマホとかを活用してほしいんです。防災行政無線で橋の通行ができるかどうかというのは逐一やっていますし、避難所のメールも出しています。防災無線は風が強かったりすると、雨戸を閉めて聞こえなくなります。しかし、携帯メールは記録に残ります。登録してくれって言いますが、「いや、俺たちのように60以上になったら携帯なんかようさわらんよ」って言うんだけど、簡単ですからさわってください。登録も、携帯会社に行ったり、行政に来ると、すぐやってくれますので、そのちょっとした面倒くささを乗り越える。そうすると、利便性が共有できて、情報も共有できて、俺も仲間入ろうかなってなるんです。そこのアクセスがなかなかできない。一定の哲学を持って、俺は携帯を使わんというのもいいですよ。いいんだけど、使えるものは使って、参加できる場合はどんどん参加して、あまり遠慮しなくていいと思っています。

もちろん、そういうつながりの中で人が担い手ですから、人を大事に育てていきたい。その際、「おまえつまらんな」と言ったら人の心が折れます。もちろん我々は行政ですから、いろいろな苦情や相談事を受ける立場ですけど、「行政つまらんな」とばかり言われると、「ああ…」となります。「たまには行政もいいことやってるな」と言われると、「よっしゃ」となるので、厳しく見守っていただいて結構ですが、たまに現場で若い職員が行ったら褒めてあげていただければ、たいへんありがたいと思います。

〈山口〉 お互いが褒められる地域ってすばらしいですよ。だから、褒め合う。3つか4つ叱られても、1つか2つ褒めてもらえれば何とか頑張れるけれども、全部が批判だと心折れますよね。できるだけ行政の職員が地域に飛び込んでいく、市役所の職員が地域に入っていくのはとても大事なことだと思いますけれども、そのときに少しでも励ましてもらったりとかすると、もっと頑張らないといけなくなってしまいます。でも、市役所の職員がそこで萎縮してしまうようだと、いい仕事をしてもらえないことになる。この平戸市の中で、市役所職員というのは貴重な市民の財産なので、市民がいかにそこを使いこなしていくのかということにかかっているのかなと思います。

それともう一点、「この地域資源いつ活かすか？ 今でしょ！！」ということですけども、先ほどか

ら、地域資源を活かすためには、いろいろな担い手、人が必要だという意見が出ています。ここで大事なキーワードがあって、「自立」です。大村さんがおっしゃっていましたが、自立ってとても大事な言葉です。自立というのは、人の助けを受けないということでは決してなくて、自分で考えることです。先ほどから市長さんは平戸のことを的確に把握されて発言されています。それでも、住民は、市長が言ったからではなく、市長が言ったことを自分の中で、「市長の話は、どうやろうか」って市民一人ひとりが反芻して考えて行動に移すことが自立です。それを「市役所が自立、自立って、何か見放すようなことを言っとるぞ」と捉えるのは大きな間違いです。これからの国・県・市町村の関係もそうですし、住民の中でもそうですけれども、それぞれ一人ひとりが、地域が、そして団体が自立して、自分たちの考えとしてものを決めていく、責任も喜びも共有し合うという流れが必要なのかなと思います。

1時間半、結構長かったですね。打ち合わせもほとんどない中で、いろいろ議論してきましたけれども、これからまた平戸の4年後、それから10年後、20年後をぜひみんなで見守りましょう。そして、こういった悩みというのは全国共通の課題だと思いますので、この地域資源というものを活かすのは今だということについて平戸の地から全国発信させていただいて、終わりにしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。